

「いばら姫」の秘密—グリム童話を考える①—

大野 寿子

グリム兄弟（兄ヤーコプ、弟ヴィルヘルム）が収集刊行した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（Kinder- und Hausmärchen）第五〇番目のお話は、「いばら姫」である。賢女の魔法ゆえ糸紡ぎの錘に刺され、一〇〇年の不思議な眠りに落ちた主人公「いばら姫」は、ちようど一〇〇年後、勇敢な王子のキスで目覚める。「いばら姫」のドイツ語原語 *Dornröschen* を正確に訳すと、「棘薔薇ちゃん」とでも記すべきであろうか。日本語の「いばら」には、①薔薇等の棘を伴った低灌木を指す場合と、②植物の棘そのものを指す場合とあるので少々ややこしいが、ここは前者の意味となる。「野ばら姫」と訳す人もいるが、ここではイメージの混乱も楽しみつつ、「茨（棘）を伴った薔薇」という花のイメージをも伴う場合は「いばら」と記し、「茨（棘）そのもの」あるいは「茨（棘）を伴った茎や蔓」の場合には「茨」と記すことにする。

さて、この「いばら姫」のお話、比較民話学上は、AT四一〇番「眠れる美女」型に属する。このAT四一〇型の類話には他にも、ペローの「眠れる森の美女」(*La belle au bois dormant*) や、バジールレの「太陽と月とタリーア」(*Sole, Luna e Talia*) 等があり、「魔法の眠り」が、共通かつ重要なモチーフとなっている。さらにその「眠り」に不可欠なのが、植物による日常世界からの遮断である。フランスのペロー版やイタリアのバジールレ版では、「森」という不気味な植生空間が「眠り」の場として登場するが、ドイツのグリム童話では、「茨の生垣」がみるみる生長し、「魔法の眠り」の空間を形成していく。ここでは、グリム版ではなぜ「茨の生垣」なのかをあれこれ考えてみることにする。

グリム兄弟は、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の第一巻第二巻にはお話を集録し、第三巻を注釈書として刊行している。その「いばら姫」の注釈に以下の記述がある。

「茨の防壁に囲まれた城の中で、真の王子——茨が彼に道を開ける——から救われるまで眠る乙女は、ジューグルトのみ通り抜けることができる炎の防壁に囲まれて眠る、古代北欧伝説のあの〈ブリュンヒルト〉なのである。乙女を刺し眠らせるあの錘は、オーディンがブリュンヒルトを刺した〈眠りの茨〉である。」



ザバブルク城

ドイツ・カッセル近郊のラインハルトの森に位置する14世紀の古城。現在は、「いばら姫」ゆかりの城として（後付けであるが）、メルヘン街道上のロマンティックな古城ホテルとなっている。ところどころ蔦で覆われた壁には、「いばら姫」のモチーフ・アートがいくつも飾られている。「いばら姫」という名の薔薇でも有名。

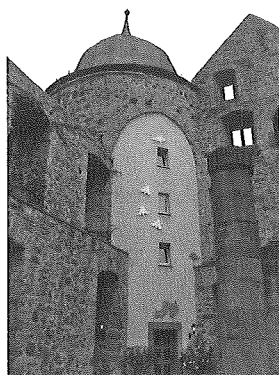
(撮影筆者)

北欧・ゲルマン神話において、その最高神オーディン（ヴォーダン）の命を受け、戦死者の魂を黄金の宮殿ヴァルハラへと誘うヴァルキューレの一人ブリュンヒルト（ブリュンヒルデ）の「眠り」の場面と、「いばら姫」の「魔法の眠り」との類似性が指摘されている。伝承文芸であるメルヒェンや伝説が、古代の神話を源泉としているという、グリム兄弟らしい見解である。また、先のイタリア語（ナポリ方言）で書かれたバジールのメルヒェン集は、一八四六年にドイツ語に翻訳されたのであるが、そこに付された兄ヤーコプ・グリムの序文に、以下のような箇所がある。

「前略」というのも、いばら (Dornrose) —あるいは眠りの薔薇 (Schlafrose)、眠りクンツ (Schlafkuntz) —という名は、あの〈眠りの茨〉 (Schlafdorn) をすぐに連想させる。その眠りの茨でオーディンは、ヴァルキューレのブリュンヒルトを刺して眠らせた「中略」。彼女は鎧と兜に身を包み、〈炎〉に囲まれ、何者をも寄せつけないヒンデル・フィアルという広間に眠るのである。」

このように「魔法の眠り」をめぐる諸モチーフの、北欧・ゲルマン神話『エッタ』からの影響を指摘するグリム兄弟ではあるが、「いばら姫」そのものが、生粋のドイツ民話であると考えているわけでもない。というのも、「いばら姫」の原稿（エーレンベルク稿、一八一〇年）の末尾には、「これはペローの眠れる森の美女から完全に由来する（または移された）ように思われる」という、ヤーコプ・グリムの書き込みがあるからである。どうもグリム兄弟は、「眠れる美女」型のお話すべてをゲルマンあるいはドイツ発祥としたいのではなく、この「眠り」のモチーフと、森でも林でもないほかならぬ「茨の生垣」との関連性において、北欧・ゲルマン神話のブリュンヒルトの逸話との深い繋がりを強調しようとしているようだ。グリム兄弟が収集した「いばら姫」の「不思議な眠り」が「茨の生垣」に守られなければならない理由、あるいは「茨の生垣」の中で「いばら姫」を眠らせたかった理由は、このあたりに隠されているといえるだろう。

さらに、兄のヤーコプ・グリムは、自身の神話研究書『ドイツ神話学』（一八三五年）にお



(撮影筆者)

いて、「オーデインが〈眠りの茨〉で、ヴァルキューレの一人を服の上から刺す」行為と、「いばら姫が錘で指を刺し、死の眠りへと落ちていく」様子との類縁性を強調している。いばら姫の一〇〇年の「眠り」が、「死」にも等しいと指摘しているのである。一〇〇年眠る「いばら姫」と一時的に死に至る「白雪姫」との関連性を、比較民話学の観点から指摘する研究もある¹⁰。また、北欧英雄伝説『ヴォルスンガ・サガ』では、楯の垣根に守られて眠るブリュンヒルトであるが、『エッダ』では、「炎の壁」に守られて死の眠りにつく。ヴァルキューレの火焰といえ、剣の象徴表現であるといわれる。槍、炎、剣、樹木といった「生垣」や「森」が、「死」に等しい「眠り」を保護する役割を担うことから、その内部が「死」の領域であるともいえる。ところがペロー版とバジレ版では、主人公の眠る「森」の内部は、同時に「出産」の場にもなるのだ。グリム版「いばら姫」には残念ながら、「眠れる美女」型メルヒェン群の第二部の幕開けとも見なしうる、「出産」の場面そのものがない。主人公は、自ら蘇生し目覚めはするものの、次の命を生み出すことはないのである。「森」と「茨の生垣」の機能的な違いを強いてあげるとすれば、この出産の場たりえたか否かは重要だ。ブリュンヒルトの「炎の壁」に遡りうる「茨の生垣」のなかで、「いばら姫」がもし「出産」をしていたら、此花昨夜姫の「火中出産」との比較等も興味深かつたであろう。

【追記】本稿は、拙論「いばら姫」における魔法の眠りと時間の喪失―グリム兄弟の文献学的観点から―(二〇〇七年、梅内幸信編「グリム・メルヒェン研究―その多様なアプローチ」日本独文学会研究叢書〇五〇号、四―一五頁)の一部に加筆を施し、エッセイとして新たに作成したものである。また、『東洋通信』の「オアシス」に随時掲載してきた「グリム童話を考える」シリーズの続きであることを付言しておく。

注

1 第一版は一八二二年(第一巻)と一八二五年(第二巻)に刊行される。その後、一八一九九年に第二版、一八三七年に第三版、一八四〇年に第四版、一八四三年に第五版、一八五〇年に第六版、一八五七年に第七版(グリム兄弟生前の最終決定版)が刊行される。

2 第一版では「妖精」が王女の誕生に招待されるが、第二版からは「賢女」となっている。

3 このA Tとは、アンティ・アールネ (Anti Arne) とステニス・トンブソン (Stith Thompson) の頭文字のAとTであり、彼らの『民話の語型』(The Types of the Folktale) の語型分類番号に添えられる。ハンス・ヨエルク・ウーター (Hans-Jörg Uther) により二〇〇四年に改訂版が出され、A TにウーターのUを付けて、A T Uと呼ぶ場合もある。

4 シャルル・ペロー『過ぎし日の物語あるいはメルヒェン、教訓付き』(一六九五—九七年) 集録。

5 シャンパティスタ・パジール『ペンタメローネ (五日物語) —メルヒェンの中のメルヒェン』(一六三四—三六年) 集録。

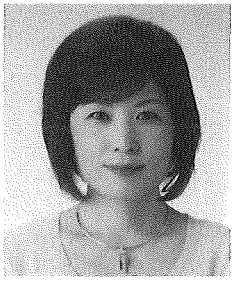
6 Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Bd.3. (1822.) Göttingen³ 1856. Nachgedr. u. hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 1994. S. 97.

7 Jacob Grimm: Der Pentamerone oder Das Märchen Aller Märchen von Giambattista Basile. Aus dem Neapolitanischen Uebersetzen von Felix Liebrecht. Nebst einer Vorrede von Jacob Grimm. In: Jacob Grimm. Kleinere Schriften. Bd.8. (Berlin 1864.) Nachgedr. Hildesheim 1965. S. 195.

8 Heinz Rölleke (Hrsg.): Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriften Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812. Genève 1975. S. 108.

9 ちなみに、「いばら姫」において受胎告知をする動物は、エーレンベルク稿、第一版、第二版では「ザリガニ」だが、第三版で「カエル」へと書き換えられている。「カエル」に関しては、拙文「水とカエルの物語—グリム童話を考える①—」、東洋大学通信教育部編『東洋』第四五巻九号(二〇〇八年)、四一七頁参照のこと。

10 竹原威滋『グリム童話と近代メルヘン』(三弥井書店、二〇〇六年) 第二章参照のこと。



大野 寿子
おの ひさこ

文学部准教授

専攻 ドイツ文学

出身 福岡県